

くくろくろ

吉岡 晶子

先日見た映画の中に、面白いシーンがあった。山奥の湖に浮かぶ小さなお御堂、中はワンルーム。その中には、仏様が祀つてある宗教的空間と、布団を敷いて寝起きする生活空間があり、部屋の真ん中あたりに唐突にある扉が空間を区切っている。同じ部屋の中なのに、その扉を通して二つの空間を行き来

して生活が営まれている。まるで幼稚園のおままごとのような造りになっていた。そこに、つましく暮らす年老いた僧侶と小さな少年がいる。少年は、朝起きて布団から出ると、わざわざ扉を開けてくぐり、同じ室内の聖なる空間に行き、仏様の前でお勤めをする。ところがこの少年がやってはいけないこと、

ちよつと後ろめたいことをしたときには、この扉を通らずに横から行き来したのである。

日頃の子どもの姿にも、くぐったり、通りぬけたり、のぞいたりするようなことはたくさんあり、その時の気持ち、心持が表れていることがよくある。

じゃがいもやさんのおきゃくさま

昨年、年長児が「じゃがいもやさん」をやることにした。自分たちが掘ってきたじゃがいもを茹でて、幼稚園中のみんなにご馳走したのである。じゃがいもが茹で上がり、園庭に会場設営。木陰にテーブルセッティングをし、看板をつけた入り口も用意した。この入り口はトンネルのような形のアーチ型でみんなからよく見えるところに置いた。いよいよ招待。まずは年少さんから。前日配ったチケットを持って入り口に並び、アーチをくぐってお店に来

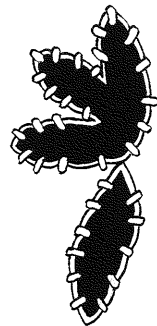
てくれた。その時、保育施設の小さい子どもたちもお招きした。手を引かれてよちよちやってきた小さな人たち。年長児は腰をかかめて声をかけ、案内しようとしている。小さくても、アーチの入り口をスーッとくぐりぬける子もいたが、なかにはどうしても足が止まってしまい、くぐれない子がいた。先生が声を掛けても、手をとつても駄目、後ろに下がってしまうのである。結局アーチから離れたところからじゃがいもやさんに入り、テーブルにつくことになった。

しっかり仕切られなくともほんのちよつと区切り、仕切りがあるだけで、そこは異空間になり、未知の世界になるのだろう。うきうきとくぐる子もいれば、この子のように不安になることもあるのだろう。違う空間に入ること、越えることはその子なりのエネルギーの要ることなんだということをこの場面であらためて感じた。

外に出るんよ

今年担任している三歳児の入園当初のことである。H子はむっつり黙っていて緊張感がからだ全体から伝わっていた。でも表情には意志の強さが表れていた。ある天気の良い気持ちのよい日、多くの子どもたちが園庭に出ているとき、H子は部屋から外への出入り口の敷居のところに立ってジーッと外を見ていた。「お外に行く？」と誘ってみたが動かない。手をとってみたが、敷居のところに爪先立ちをして一歩前へは出なかった。その足元に気持ちが表れていた。今はまだ敷居の手前のほうが安心なのだろうと思う、そこにいられるようにそーっと私はその場を離れた。

ある日、私が外に出ようとする、H子は絵本を持ってきて「読んで」と言った。H子が直接関わって言葉をかけてきたので、ぜひ応えてあげたいと



思った。片手は外に引っぱられているが、ここはなんとかなければと、敷居のところに座って絵本を読むことにした。H子は椅子を持ってきて座り、少し後ろから私の肩越しに見ていた。何人か集まってきた楽しい雰囲気になった。一冊読み終わると、H子は「これも」と本を持ってきて、H子が選んだ本を数冊読むことになった。

数日後、H子はなんのこともなく、いつのまにか外に出て砂場で遊んでいた。小さいなりに自分でふんぎりをつけ、新しい空間へと一歩踏み出したH子。

H子にとっては敷居の向こうはまだ未知の世界、そう簡単には行けないところだったのである。未知の世界に向かうときの不安や緊張感を乗り越えて通り

ぬける時、そのきっかけはちよつとしたことかもしれないが、区切りの敷居のところを過ぎた時間は大切な時間だったのだろう。

さえぎるもの無い広い空間は、開放感があつてとても気持ちがいい。でも、空間に何も無いときと間に何かあるときでは、あるほうがむしろその先、向こう側を感じる。向こうに何かあるのだろう、どうなっているのだろうかとイメージをくすぐられる気がする。見えていても見えないような……。

普段の遊びの中で、子どもたちはなにげなく自然にいろいろな空間を歩き来しているように見える。でも、異空間の雰囲気や空気を感じて空間を越えることは、深呼吸して「えいやっ」と気合を入れることでもあるのだろう。踏みとどまったままでなく、勇気を出して越えていって欲しい。感じ方、表し方は人それぞれであるが、小さな子やH子のようなちよつとしたとまどい、感じることは、ビクビクす

るということではなく、場の空気を感じる大事な感覚ではないだろうか。どうしようか、行こうかやめようか、気持ちがふれること、揺れていること、迷っていることを察知し、揺れていることを認めてあげること、乗り越えることを支え保障することが私たちの役目なのだろう。

シンボルとなったアーチ

昨年、生活を進める中で、みんなの象徴、シンボルとなるアーチが登場し、一年間アーチをくぐりながら世界を広げてきた。

四月 始業式。先生たちが遊戯室の入り口に並

んで花道を作ってくれた。そこを通ると、きは嬉しそうな、はずかしそうな、ちよつと緊張した表情。通りぬけると年長だけの始業式。いつもと空気が違う

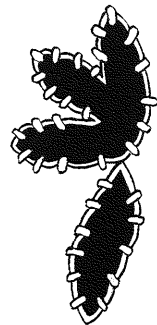
気がしてぐーんと大きくなった気分。
きょうから年長だ！ 嬉しそうだった。

五月 園庭での“遊園地ごっこ”。入り口を作

るのに苦労した。棒を立てて看板を下げてチケット売り場にしたが、すぐに倒れてしまう。椅子を置いたり机を並べたりしてなんとか入り口らしくしたが、修理に追われてしまった。でも、年少、年中さんはちゃんとそこを通ってくれた。

六月 “じゃがいもや”。遊園地ごっこの体験

を生かし、今度は倒れにくいように、土台のアーチは木製。この土台は、これまでは大人が必要に応じて利用していたものだったが、これに“じゃがいもや”と看板をつけて入り口にした。園庭のど真



ん中にどーんとアーチを置いてみんなを
ご招待。チケット係、案内係がここに並
びせつせと接客。長い行列ができ、それ
がますます張り切らせてくれた。

このアーチが卒業までみんなのシンボル
となった。

十月 運動会。入場門をアーチで作った。年長

全員が描いた絵を貼り、みんなの力の結
集。くぐり抜けるとそこは晴れの舞台。
綱引きもリレーもここから颯爽と入場し
た。緊張感があつた。退場したときは、
ホッとした安堵感で顔がほころんだり、

友だちと手を取り合ったりした。

三月 いよいよ卒業。時間をかけて作っていた

十一月 クリスマス。どんな飾りにしようか

一人ひとりの手作りの小さな織物を全員分飾り付けた。卒業の日、そのアーチを

……。なにか大きな活動にみんなを取り組もうとするときいつも中心にあった

くぐってみんな新しい世界に羽ばたいていった。

アーチがここでも活躍。茶色だったアーチを緑色に塗り替え、それぞれが作ったクリスマス飾りでデコレーション。遊戯室に飾り、キラキラ輝くイルミネーションも加えた。

子どもたちはいろいろな物事をくぐりぬけて大きくなつていく。スーッと通れるとき、後戻りしなくなる。迷路に迷い込んでしまったとき、一人で通れないときは友だちと一緒にいることもあるだろう。行ったり来たりもするかもしれない。迷つてもいい、時間がかかってもいい、そのときはむしろ貴重な体験をしている。とまどつたり、迷つたり、つま

二月 “図書館ごっこ”。絵本作りから始まり図書館へと広がった遊びのときもアーチが活躍した。そこを抜けると中は図書館。本棚があり、手作りの本が並んでいる。異次元の世界があった。

ずいたりする姿をしつかり捉え、くぐりぬけられるよう支えたい。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)